

Title	1921年の中部ドイツ武装蜂起(下)
Sub Title	Aufstandsbewegung im Mitteldeutschland 1921 (II)
Author	細田, 信輔
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1986
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.79, No.4 (1986. 10) ,p.419(81)- 439(101)
JaLC DOI	10.14991/001.19861001-0081
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19861001-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19861001-0081</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 1921年の中部ドイツ武装蜂起(下)

細田 信輔

## I 序

## II 「蜂起」の全貌

### 1 「蜂起」の前史

### 2 「蜂起」の発生から終結まで

#### a マンスフェルト

#### b ロイナ工場

### 3 「蜂起」の收拾と結末(以上、〈上〉『三田学会雑誌』79巻2号, 1986年6月号)

## III 「蜂起」の分析(以下、〈下〉)

### 1 地域社会と大衆運動

#### a マンスフェルトとロイナ工場の産業と労働現場

#### b ロイナ工場における職場と居住地

#### c マンスフェルトにおける職場と居住地

#### d 大衆運動の拠点としての地域社会

### 2 マックス・ヘルツ論

#### a ヘルツの神話的肖像

#### b 行動の情緒性と非計画性

#### c ヘルツと地域社会

#### d ヘルツと大衆運動

## IV 結語

## III 「蜂起」の分析

本稿(上) I で筆者は、従来の「蜂起」(1921年の中部ドイツ武装蜂起)研究の政治的、党派的性格を批判し、「蜂起」を実際に担った中部ドイツの大衆運動 *Massenbewegung* を主要な分析対象として掲げたが、「大衆 *Masse*」もしくは「大衆運動」という用語は、必ずしも歴史学上の明確な定義をもつものではない。F. ボルは、さきに指摘したG. D. フェルドマンらの方法論上の問題意識<sup>(1)</sup>を継承し、やはり大衆と指導者 *Führer*、自然発生性 *Spontaneität* と組織 *Organisation* の関係から、そしてさらに、近年の社会学の諸成果をも考慮しながら、「大衆運動」論を発展させているが、明快

注(1) 本稿(上)、『三田学会雑誌』79巻2号, 1986年6月号, 108頁の注(21)を参照。

な歴史的概念を提示するまでには至っていない。<sup>(2)</sup>にも拘らず、筆者が「大衆運動」という用語に固執するのは、それが、既成の政治組織及び労働組織の運動に対する概念としての、また一方で、社会運動の包括的かつ広義の概念としての意味合いを含むとともに、本稿(上)IIで概観した「蜂起」の実態に即しているからに他ならない。すなわち、「大衆運動」という概念の内容は、本稿では、マンスフェルトの各地域社会を中心に発生した、住民大衆の超階級的かつ超党派的な運動を具体的に分析していく中で明らかにされよう。

本章においては、「蜂起」でまさしく露出した中部ドイツの大衆運動を、第一節では、彼らの生活領域である地域社会の枠組の中で、第二節では、彼ら大衆の指導者 Führer der Masse となったM. ヘルツとの関係の中で分析し、次の第IV章を全体の総括としたい。

### 1. 地域社会と大衆運動

「蜂起」の双壁となったマンスフェルトとロイナ工場では、本稿(上)IIで詳述したように、相互に対照的な運動形態が現出している。かかる対照性は、中部ドイツの大衆運動を考察する上で、重要な問題を提起している。すなわち、マンスフェルトの「攻勢的」かつ「遊動的」な運動形態に対して、何故、ロイナ工場では「守勢的」かつ「静止的」な運動形態が発生したのか、という問題である。この二つの対照的な運動形態を規定した外在的要因として、まず、両地区における対権力関係の相違に注目する必要がある。

両地区で経営者側がほぼ同時期に職場内の屑木材の持帰りを禁止したのは、すでにみたとおりである。この経営者側のとった措置が、それまでの険悪な労使関係をヨリ悪化させ、ついには治安警察の出動を導いたのだが、その後の両地区での運動経過をみて明らかなのは、ロイナ工場では、運動がマンスフェルトの一連の出来事に追従し、または、それを利用しながら進行していたことである。ロイナ工場での3月21日の大集会と23日のゼネストと労働者軍事組織の編成が、19日の治安警察によるマンスフェルトの軍事的制圧と22日からの当地での衝突事件を、それぞれの主要な契機としているように、ロイナ工場の闘争指導部は、マンスフェルトにおける警察権力の「弾圧」行為に抗議し、当該地区住民との連帯をアピールすると同時に、同工場労働者の不安をかきたてることによって、運動を組み立てている。そのために、警察報告が指摘するような、事実の歪曲や捏造または流言飛語が、外部から孤立していたロイナ工場での運動形態を規定していた側面を看過することはできない。<sup>(3)</sup>しかし本質的には、外部の労働者と共闘することもなく、国家権力が攻撃を開始してくるまで工場内で待機するという闘争指導部の戦略戦術のために、運動は「守勢的」かつ「静止的」になり、労働者の方にも危機感や臨場感が乏しかったとみるべきであろう。「蜂起」の中で垣間

注(2) Friedhelm Boll, *Massenbewegung in Niedersachsen 1906-1920. Eine sozialgeschichtliche Untersuchung zu den unterschiedlichen Entwicklungstypen Braunschweig und Hannover*, Bonn 1981, S.11-16.

(3) W. Drobnig, a. a. O., S.169.

見る同工場の風景や、<sup>(4)</sup>29日の「陥落」のとき、ほとんど抗戦することもなく、警察隊の隊列の前に降伏した労働者の姿は、<sup>(5)</sup>彼らのそのような状態を象徴するものである。この闘争指導部の問題、とくにケンピンの行動は議論の集中するところだが、<sup>(6)</sup>その前提及び背景として確認すべきは、ロイナ工場が「陥落」の29日まで治安警察の出動地区から外され、警察権力の直接的な介入を受けなかったことである。それとは反対に、当初より治安警察との緊張関係にさらされたマンスフェルトでは、労働者が警官隊と小規模な戦闘を何度もくりかえし、定まった陣地を設けずに戦場を次々と変えていくゲリラ戦術を駆使したことから、両地区の対照的な運動形態を規定した<sup>(7)</sup>内外的な要因として、まず第一に、対権力関係の相違が指摘できるのである。

以上は、「蜂起」の戦局の中で看取される相違点であるが、しかしそれは、いわゆる政治的ないし軍事的状況に起因するものでしかない。すなわち、両地区の運動形態を基本的に規定した<sup>(8)</sup>内外的な要因が、また一方で求められなければならないのである。以下では、両地区の大衆の現実に下降し、彼らの生活領域に起因する問題を中心に比較分析が試みられることになる。

#### a マンスフェルトとロイナ工場の産業と労働現場

両地区の運動の分析は、とりあえずは方法論上の問題と関連させながら進められる。具体的には、「蜂起」の年代を取り扱ったR. ウィーラーの論文、『ヴァイマル共和国初期の労働運動の社会的構造について。若干の方法論的論評』を<sup>(7)</sup>批判的に検討することによって、分析の手懸りとしたい。

ウィーラーは、労働者の政治的傾向を「急進的 radikal」なものと「保守的 konservativ」なものに二分し、このような二つの傾向がその時代（ヴァイマル共和国初期）の政治的状況によって大きく影響され、かつ流動的であることを前提としながらも、それらと労働者階級内部の社会構造との相互関係の中から一定程度の因果性を見出そうとする。そして、その社会的構造を分類する変数 Variable として、ウィーラーは、I「性」、II「年齢」、III「職業」、IV「職場」、V「居住地」をとりあげ、それに<sup>(8)</sup>応じて五つの仮説を立てている。彼は、その中でも、仮説IV「職場と政治的傾向」を論じる際に、ロイナ工場を引用して、大工場労働者の急進的傾向を例証し、このような巨大工場に特徴的なこととして、それが新部門の産業（当時は化学、金属工業）であり、次に、その労働力の高度の集中性を指摘するのである。<sup>(9)</sup>このウィーラーの方法を適用すれば、ロイナ工場は、すでに<sup>(10)</sup>仮説III、IVによって、さらにその大多数が若年労働者であったことから、仮説IIによっても、労

注(4) 本稿(上)、120頁。

(5) 本稿(上)、122頁。

(6) 本稿(上)、121~122頁。

(7) Robert Wheeler, Zur sozialen Struktur der Arbeiterbewegung am Anfang der Weimarer Republik. Einige methodologische Bemerkungen, in: Industrielles System und politische Entwicklung in der Weimarer Republik. Verhandlungen des Internationalen Symposiums in Bochum vom 12-17. Juni 1973. hrsg. von H. Mommsen, D. Petzina und B. Weisbrod, Düsseldorf 1974, S. 179-189.

働者が急進化するのに格好の諸条件を備えており、そして実際に、創業時にあたる第一次世界大戦の戦間期から急進的な運動を展開してきたのは、前述のとおりである。このウィーラーの変数以外に、ロイナ工場の労働者を特徴づけるものは、その大多数が周辺地域の農民層、職人層の出身者であるか、または戦中戦後にドイツ全国各地から流入してきた移住者であったことである。<sup>(12)</sup>なかでも敗戦により割譲されたエルザス・ロートリンゲン、オイペン・マルメディの炭鉱地帯からの移住者が大きな割合を占め、その多くは、戦後の激動期に経済的にも精神的にも不安定な境遇に追いこまれて、この地に漂着したものであり、それまで中部ドイツとは血縁及び地縁の繋りをもつものではなかった。<sup>(13)</sup>いふなれば、ロイナ工場は、労働運動の経験をほとんどもたぬ周辺の農村出身者や全国各地からの流民の集結地であり、上記の諸条件を加味するならば、「反国家的なアジテーション」<sup>(14)</sup>にとって好都合な場であったといえる。

一方のマンسفェルトは、前述の如く、銅、カリ塩、石炭の採掘、製錬、加工の各部門からなる、古い歴史をもつ鉱山地帯であり、とくに銅山は国内採掘量の約90%を産出している。<sup>(15)</sup>しかし、それは国内需要の僅か10%を満たすにすぎず、しかもドイツ電気産業は、アメリカから導電力に優れた銅を輸入し、マンسفェルトに依存することは、戦時中を除けばほとんどなかった。<sup>(16)</sup>また、マンسفェルト鉱山の各部門が統合されたのは19世紀中葉であるが、それは社名 **Mansfeldsche Kupferschiefer bauende Gewerkschaft** の示すように、共同鉱業者組合 **Gewerkschaft** の形態をとる貴族資本中心の組織であった。<sup>(17)</sup>同組合が株式会社(Mansfeld A.G. für Bergbau und Hüttenbetrieb)として正式に発足したのが1921年10月であることから、「蜂起」は、<sup>(18)</sup>鉱山経営が近代化される過渡期に発

(8) Ebenda, S. 181. ウィーラーの提起した五つの仮説を簡単に図表にすると、以下のようになる。

変数	傾向	急進的	保守的
I	性別	男性	女性
II	年齢	若年	中、老年
III	職業	新部門工業労働者	旧部門工業労働者
IV	職場	大工場	中小工場
V	居住地	密集型	分散型

ウィーラーは、多くの史料をもとに以上の仮説を立てているが、彼自身も認めているように、それらは試論の域を出るものではない。Ebenda, S. 189.

注(9) Ebenda, S. 187.

(10) Reichskommissar, R 134/47/27.

(11) ロイナ工場の労働者に関する「仮説」の適用は史料的に確認できるものに限定されるため、仮説Iは採用しない。

(12) W. Drobniq, a. a. O. S. 1. 戦後3年間で全従業員数は、14,400人から22,000人へと飛躍的に増大している。本稿(上), 108, 118頁参照。

(13) W. T. Angress, a. a. O. S. 162.

(14) W. Drobniq, a. a. O., S. 1.

(15) Hans Radandt, *Kriegsverbrecherkonzern Mansfeld. Die Roll des Mansfeld-Konzerns bei der Vorbereitung und während des zweiten Weltkrieges*, Berlin 1957, S. 6.

(16) Ebenda.

(17) Ebenda, S. 18.

(18) W. Hoffmann, a. a. O., S. 95.

### 1921年の中部ドイツ武装蜂起(下)

生したとみてよい。<sup>(19)</sup>次に労働現場に視点を移そう。マンスフェルト鉱山全体の従業員数は、ロイナ工場とはほぼ同数の約2万人であるが、同工場のように一箇所に集中しておらず、各部門別に、かつ地理的にも隔てられて配置されている。<sup>(20)</sup>両者の生産及び労働過程をも考慮すれば、労働力の集中度に関して、マンスフェルト鉱山はロイナ工場に到底及ばないことは明らかである。<sup>(21)</sup>全鉱山の従業員数も、戦争の前後を通じて2万人を上下するのみで、大きな変動がなかったことから、<sup>(22)</sup>ロイナ工場のように新参者が大量に流入してくることもなく、労働者の多くは定住者で、その平均年齢もロイナ工場ほど低くなかったことが推定される。

ウィーラーの仮説にふたたび戻って、両地区を比較すれば、II——若年労働者が主体である、III——新部門の工業労働者である、IV——巨大工場である、という労働者が急進化する諸条件において、マンスフェルトはロイナ工場に匹敵するものはない。かくして、ロイナ工場の労働者は急進的であり、それと比較してマンスフェルトの労働者(主に鉱夫)は相対的に保守的である、という定式が少なくとも導き出されるはずである。しかし、「蜂起」の実際の主勢力となり、その最前線にいたのはマンスフェルトの労働者の方であった。この事実がウィーラーの方法論の批判的検討を要求しているのはいうまでもない。それでは、ウィーラーの提起した方法論の問題点は何であろうか。

「蜂起」の分析にのみ限定していえば、職場と居住地の関係を、仮説のIV、Vとして個別のかつ断片的に把握しているために、<sup>(23)</sup>生活者としての労働者が見失われていることである。筆者がこれまで仮説Vを両地区の比較分析に適用しなかったのは、ウィーラーにおいては、仮説IVとの関係がまったく配慮されていないために、同一の分析対象に重ね合わせることができなかったからに他ならない。「蜂起」における両地区の運動を分析するには、個別的な調査資料の組合せによってではなく、それらの相互関係を視野にいれた生活領域という枠組の中で労働者を捉えるべきであり、またそれを不可避としている。それは同時に、運動それ自体を労働運動から大衆運動という拡大化された枠組の中で捉えなおすことでもある。

さて、「蜂起」の事実経過の中で、両地区の運動の分岐点となったものは何であろうか。対権力関係のほかに、これを求めるならば、ロイナ工場において、3月23日のゼネスト決議後、全労働者の約80%が帰宅し、それ以後の闘争を事実上放棄したことに帰着するであろう。<sup>(24)</sup>その原因を両地区

注(19) マンスフェルト鉱山の近代化は、第一次世界大戦後、同鉱山の経営権がそれまで大株主であった少数の貴族の手から、組織的かつ計画的に株の買占めをおこなった銀行・産業資本へと移行したところに端を発する。その経緯については、H. Radandt, a. a. O., S. 19 ff. に詳しい。このような背景をふまえて、「蜂起」の前段階で経営者側のとった措置(現物賃金の廃止、管理体制の強化等)を考えると興味深いものがある。

(20) W. Hoffmann, a. a. O., S. 130 ff. を参照。

(21) 最大部門の銅鉱山の全立坑(6)を合わせても従業員数は12,545人であった。Ebenda, 133.

(22) Ebenda, S. 95. Karl Lärmer, Vom Arbeitszwang zur Zwangsarbeit. Die Arbeitsordnungen im Mansfelder Kupferschieferbergbau von 1673 bis 1945, Berlin 1961, S. 292.

(23) R. Wheer, a. a. O., S. 187-188.

(24) 本稿(上), 120頁。

の労働者大衆の生活領域の中で考察するならば、すでに言及したように、その核心を職場と居住地の関係に収斂させることができる。この二つの要素が共存していたか、分離していたか、という関係が、両地区の運動にとって重要な意味をもっていたのである。

#### b ロイナ工場における職場と居住地

ロイナ工場の一部の労働者は、後に述べるように、工場付近の社宅 Kolonie に住んでいたが、その他大多数の労働者は、ライプツヒからエアフルト、ハレからツァイツまでの広範囲な地域に分散して住んでおり、その範囲は拡がる一方であった<sup>(25)</sup>。ここでは、同工場の中で大きな割合を占めていたこの遠距離通勤労働者に視点を定め、職場と居住地の分離が運動にもたらした影響について検討してみたい。最初に、当時のロイナ工場の労働者の通勤風景を再現しよう。

「毎日8時間、労働者はこの工場の非人間的な雰囲気の中で暮す。彼らは、駅で待ったり、列車にギューギュー詰めにされては惨めなエゴイズムへと押しやられ、窮屈と蒸暑さ、汗と喧嘩といった騒々しい息苦しさの中で4時間、いやそれ以上を過ごすのである。彼らは、1日の僅かな残り時間のあいだだけ人間であり、夫であり、父である。しかし我が家といっても、その90%は、心配事や家庭の厄介事が彼らを待ちうけている。そして翌朝ともなれば、彼らはふたたび列車の席をとるために悪戦苦闘する。そしてまた8時間、彼らはこの工場の巨大なメカニズムの中に組み込まれるのである。」<sup>(26)</sup>

このような生活環境の中で、ロイナ工場の労働者は如何なる意識をもちえたのだろうか。さらに同報告を引用しよう。

「それ(ロイナ工場)は労働力を吸い上げ、消費する。この工業の消化器管にとって、労働力など取るに足らぬ小部分であり、非人間的な数値でしかない。これら労働者は、ハレ、ライプツヒ、エアフルトのどこそこかでは人間であるが、ロイナ工場では、ある機能をもったアトムである。だがところが、彼らはその機能の意義をまったく知らないのである。この工場では、いったい何を生産しているのかと訊くと、カリと答えるものもいれば、爆弾もしくは化学的な有毒物と答えるものもいる。だれも正確なことは知らない。彼らは、そこで何らかの労働をするだけでよく、何時間も遠く離れたところに住み、見知らぬ職員から、数えて出された賃金を受け取る。この職員も彼らのことを知らない。彼も、その賃金を支払うために、やはり名前もまたそれ以上のこともほとんど知らない別の職員から、数えて出された給料を受け取るのである。同様に労働者同士もお互いを知らないでいる。」<sup>(27)</sup>

このように、ロイナ工場では、その巨大な工場規模もさることながら、職場と居住地が極端に分

注 (25) Edgar Hahnewald, Leunawerk, in: Die Glocke, VII(1921), S. 40.

(26) Ebenda, S. 41-42.

(27) Ebenda, S. 40-41.

離し、かつ居住地が広い地域にわたって分散していたことが、工場内の労働者間の交流や結合を阻んでいただけでなく、マンスフェルトをはじめとする中部ドイツ一帯の出来事（とくに治安警察と労働者の衝突）から彼らを疎隔する原因となっていたことは、容易に推察がつく。それ故に、そして前述した政治的状況（対権力関係）にもよって、少なくともゼネスト開始後帰宅したロイナ工場全体の約80%の労働者にとって、マンスフェルトの出来事は切実な問題になりえなかったのである。このようなロイナ工場の労働者の現実、それまで急進的といわれた同工場の労働運動の中でもしばしば現われている。とくにその闘争目的が、戦中戦後と一貫して主に経済的な待遇改善に定められ、他の地域にくらべて政治性に希薄であった事実は、それを例証するものであろう。そして同様に、ゼネストと武装防衛を決議した闘争指導部主流派のKAPDやAAUも同工場の「巨大な、だが内容的にはバラバラな、無数の労働者大衆の集群」<sup>(29)</sup>を把握できなかったのである。

### c マンスフェルトにおける職場と居住地

マンスフェルトでは、各部門別に、または各鉱山別に職場と居住地が共存し、<sup>(30)</sup>コンツェルン所有の約960棟の社宅は3,200戸以上の住居を備え、労働者とその家族を含めて13,400人以上がそこに住んでいた。<sup>(31)</sup>労働者は職種別にはほぼ同一の地域社会の中で生活していたとみてよからう。このような環境は、労働者の運動にとって如何なる意味をもっていたのだろうか。すぐさま想像されることは、ロイナ工場と比較して、仕事と家庭が空間的・時間的に近接していたため、両者の区分が実際の生活や意識面において曖昧であったこと、それは労働者の物的利害関係や対人関係にまで及び、職場と社会生活の問題が渾然一体となり、相互に不可分かつ不可欠の関係にあったこと、さらにこれを拡大視すれば、職場と居住地の共存性は、政治経済のみならず文化習俗の領域をも包含する地域社会の基盤をなしていたこと、等である。そして実際に、このような地域社会の特殊性を利用しながら、マンスフェルトに支配権を確立していたのが、コンツェルン *Mansfeldsche Kupferschiefer bauende Gewerkschaft* であった。

マンスフェルトでは1918年の11月革命まで、<sup>(32)</sup>貴族資本による前近代的経営下の労使関係と同資本による当地域社会に対する伝統的支配によって、労働者は全生活領域において収奪され、また束縛されていたのである。社宅に住んでいた労働者の中には、本業の他に、周辺の土地で農作物や家畜を栽培、飼育しながら生計をたてているものが多かったが、コンツェルンは、彼らに貸付金を押しつけてこの社宅と土地を購入させ、約30年間の返済契約によって、彼らを親子二代にわたって身動

注 (28) 本稿(上), 109, 110頁。P. v. Oertzen, a. a. O., 134-135. を参照。

(29) E. Hahnwald, a. a. O., S. 43.

(30) MELSI, a. a. O., S. 90-91.

(31) W. Hoffmann, a. a. O., S. 175.

(32) 革命後、マンスフェルトの労働者は、彼らを束縛していた前近代的な労働規約を次々と改善もしくは廃止していく。その過程は、K. Lärmer, a. a. O., S. 196 ff. に詳しい。

きのとれぬ状態に置いた。<sup>(33)</sup>もし解雇されれば、彼らは、ほとんどすべての財産権利を失い、家族とともに当地域社会から生活の場を奪われたのである。<sup>(34)</sup>このコンツェルンの政策のために、労働者は、1890年に設立された、いわゆる黄色労働組合に強制的に加入させられ、公認されていた団結権すら行使できないでいた。<sup>(35)</sup>SPDや自由労働組合系の運動は、経営者側のテロルと解雇処分による圧力によって定着せず、<sup>(36)</sup>従って労働者(鉱夫)の賃金も、ルール地方やオーバーシェレージェンなどの他の鉱山地帯にくらべると、<sup>(37)</sup>戦中戦後を通じて相対的に低い。というも、既成の秩序に反抗あるいは逸脱すれば、職場と居住地の両方で疎外され、結局は地域社会から追放されたからである。このような例は、労働者に限らず、職員や経営外の住民にまで及んだという。<sup>(38)</sup>「人々は他人を避けて、密告を恐れ」、「卑屈と腐敗が蔓延る」という閉鎖的な地域社会に特有な共同性は、マンスフェルトの労働者の運動を抑圧し、革命まで彼らを政治的な影響から隔離していたといつてよかろう。<sup>(39)</sup>しかし、このような共同性は、マンスフェルトの労働者の運動にとって、必ずしも桎梏となっていたわけではない。それは、状況によっては、従来までの悪条件を好条件に転化させるだけのダイナミズムをもち、運動を激化させる原因ともなった。その典型的な事例を、1909年9月から始まる大ストライキにみることができる。

ストライキの発端となったのは、自由労働組合系の鉱夫協会 *Bergarbeiterverband* に加盟しようとした労働者の大量解雇であった。さらに、労働条件の改悪措置が拍車をかけ、約一万人の労働者がストライキに参加し、ストライキは、マンスフェルト鉱山のほぼ全体が操業停止となる空前の規模となった。<sup>(40)</sup>この闘争は、経済的な要求よりも団結権の獲得を目的とするもので、<sup>(41)</sup>いうなれば、従来のコンツェルンの専制的支配に対する労働者の憤懣が一挙に噴出したものである。鎮圧には警察だけでなく、軍隊も動員されたが、それでもストライキは6週間も貫徹される。<sup>(42)</sup>さて、このマンスフェルトの労働者の運動は以下の二つの特徴において際立っている。まず第一に、闘争をかくまで強固に支えてきたのは労働者だけでなく、その妻や子供であったことである。とくに、ストライキが起きるまで自由労働組合系の鉱夫協会に根強い不信と不安を抱き、運動の足枷となっていた女性が、一変して、男性を牽引していくほどの行動力を発揮した事実は看過できない。<sup>(43)</sup>次に特徴的なことは、

注 (33) Ebenda, S. 181-182.

(34) Ebenda, S. 181.

(35) Institut für Marxismus-Lenismus beim ZK der SED (以下、IML と略す), *Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*. Bd. 2, Berlin 1966, S. 144. なお、この「黄色労働組合」*Verein Reichstreuer Mansfelder Berg-und Hüttenleute* は、革命直後の1918年12月に労働者の運動によって解体された。K. Lärmer, a. a. O. S. 199.

(36) IML, a. a. O., S. 144.

(37) *Bergarbeiter Zeitung*, Nr. 19, 7. Mai 1921.

(38) J. Schneider, a. a. O., S. 17-20.

(39) *Bergarbeiter Zeitung*, Nr. 15, 9. April 1921.

(40) *Vorwärts*, Nr. 232, 5. Oktober; Nr. 234, 7. Oktober 1909.

(41) *Vorwärts*, Nr. 249, 24. Oktober; Nr. 250, 25. Oktober 1909.

(42) IML, a. a. O., S. 144-145.

その徹底性と極限性である。たとえば、ストライキ末期の絶望的状况に至っては、1,000人を超す若者のマンスフェルトからの集団脱走が計画され、その数は当地域の青年層(18~27歳)の80~90%にあたるものであった。<sup>(44)</sup>このような集団行動は、従来の労働者「(鉱夫)」のストライキには異例のことであり、当時の新聞によれば、「ヴェストファーレン、シュレージエン、中部ドイツ、ロートリンゲン——この場合、定住の労働者はほとんどまったく問題にならない——でも、マンスフェルト地区のように、ストライキをしているものが自らすすんで、それも集団的に仕事や郷里を捨てることはなかった<sup>(45)</sup>」といわれる。かかる現象は、ストライキそれ自体の質が、他の地域のように計画性をもつ組織的なものではなく、一過性ではあるが徹底的かつ極限的なものであったことを示している。以上の二つの特徴に端的に表われているように、1909年の大ストライキにおいて、職場と居住地の共存性は、労働者の運動を家族ぐるみの住民大衆運動へと拡大させ、地域社会全体を闘争の拠点へと転化させている。すなわち、それまで運動の阻害要因として機能していた閉鎖的な地域社会の共同性は、ストライキの過程の中で、運動を促進させる要因へと逆転したのである。

ストライキが敗北した後、マンスフェルトでは、以前と同様にコンツェルンの一元的な専制的支配が復活したが、<sup>(46)</sup>かかる歴史のコンテクストからみれば、革命以後にマンスフェルト一帯で始まり、「蜂起」へと高揚した大衆の攻勢的運動は、1909年の大ストライキの再来とみるのできるのである。

#### d 大衆運動の拠点としての地域社会

「蜂起」でも、1909年の大ストライキと類似の現象を散見することができる。「(蜂起の中心地域で)とくに目立ったことは、穏和な労働者の多くが過激な活動に対する抵抗をあまりみせなかったことである。年配でおとなしい人々の数百人位をテロルで脅してストライキ等へ煽動することは、一握りの騒動屋——大抵は若者——がいれば十分であった。<sup>(47)</sup>」この警察報告が指摘するように、「叛徒」とそれ以外の人々の間にはさほどの距離を感じさせないばかりか、同報告の、「蜂起の間、その他(「叛徒」以外)の住民には、治安警察との接触において、叛徒に関する情報を提供することに、当初は大きな不安や消極性がみられた。というのは、そのお返しとしての復讐を恐れたからである。<sup>(48)</sup>」という指摘からも、このとき「叛徒」に変身したのは、日常的に身近の、あるいはそれと感じさせ

注(43) それまで婦人たちは、彼女らの夫が鉱夫組合に加盟しようとするれば、鉱山官吏に密告までもして止めさせるほどであったが、ストライキが始まると彼女らは、集会や会議に積極的に参加し、今度は鉱夫組合の熱烈な支持者に変わったのである。Vorwärts, Nr. 237, 10. Oktober 1909.

(44) Vorwärts, Nr. 261, 7. November 1909.

(45) Ebenda.

(46) ストライキの決定的な敗因となったのは、企業家連盟の支援を得た経営者側が、集団脱走する労働者に対して全国的な労働市場からの締め出しを脅迫したことであった。IML, a. a. O., S. 145.

(47) W. Drobbig, a. a. O., S. 170.

(48) Ebenda.

る人々であったことが窺える。さらに、同報告の「蜂起」に関する総括部分を引用しよう。「武装蜂起というものは、大抵は十分な前提のもとでのみ起きるもので、住民をそれまでに組織していなければ不可能である。ところが、中部ドイツの武装蜂起を準備するにあたって、反国家的分子は、諸々の理由……によって通常とは違った道を選択した。彼らは、強力に結束した組織を形成することを度外視し、個々の経営の中で、とくに信頼できる同盟員からなる突撃隊を編成しただけにとどまった。当時、彼らは、このような突撃隊が大衆を魅了することに期待をかけていた<sup>(49)</sup>のである。」

以上の報告によって、「叛徒」と「一般住民」、または「叛徒」同士の間には、政治的な党派性や、それに付随する意識が媒介していたというよりも、むしろ人格的な結合関係を基軸とした「身内意識」のようなものが看取される。治安警察に非協力的だったのは、「一般住民」が「叛徒」に同情を寄せていたこともあろうが、それ以上に治安警察が、自治体警察と違って、当地域にまったく馴染みのない「余所者<sup>よそも</sup>」であったからであり、これを裏返していえば、もし協力すれば、裏切り行為として「復讐」されるだけの親和的な共同性が身近に存在していたからに他ならない。すなわち、1909年の大ストライキの場合と同様に、マンスフェルトの地域社会では、レーテ運動、反カップー揆武装闘争を通じて、革命前とは逆転した現象が生じていたといえよう。治安警察の進駐に対するヘットシュテットでの全住民的な抵抗運動<sup>(50)</sup>や、「蜂起」が開始されてから、いくつかの村々で「レーテ共和国」の樹立が宣言されるなど、地域社会全体が「蜂起」の拠点となっていたのはその証左<sup>(51)</sup>であるが、なかでもシュラブラウはその代表的なものであった。この地域に関しては、ヘルツとシュナイダーの記述も一致している。

「復活祭第1日の朝、先発隊がシュラブラウに到着し、現地の労働者からたいへんな歓迎をうけた。シュラブラウとトイチェンタールは共産党の牙城であり、労働者は随分前から革命の前線に参戦する日を待ちこがれていた。2、3日前には、治安警察の大部隊がシュラブラウ地区から追い払われ、大損害をうけて、アイスレーベンに撤退した。……シュラブラウの労働者は赤軍を迎えるにふさわしい準備をすべてしていた。広場では楽団が整列し、若者は道の両側に並んだ。我が部隊は、いつまでも続く万歳の声とともに兵舎まで案内された。そこで1日だけ、それまで絶え間なかった激闘の骨休めをすることになった。連行してきた人質たちにも校舎があてがわれ、そこでは彼らのために快適な宿泊所が用意されて<sup>(52)</sup>いた。」

「夜遅く、我々は、ザンガーハウゼンを撤退し、翌日の日曜日を利用して、シュラブラウで疲労

注 (49) Ebenda, S. 1-2.

(50) 本稿(上), 112-113頁。

(51) Vorwärts, Nr. 146, 29. März 1921.

(52) 地域社会全体とまではいなくとも、マンスフェルトの各地域の住民が「蜂起」を陰に陽に支援、補助していたことは十分に想像できる。中心都市アイスレーベンでも「一般市民」が「叛徒」をコーヒーでもてなす姿がある。J. Schneider, a. a. O., S. 46-47.

(53) Ebenda, S. 50.

困憊した革命戦士たちに休養を与えた。この石灰工場に囲まれた狭い場所には、階級意識をもった労働者が住んでおり、我々を熱狂的に歓迎し、もてなしてくれた。<sup>(54)</sup>

このシュラブラウなどは、地域社会全体が「蜂起」の拠点となった好例だが、それでは、「叛徒」は、このように協力的で友好的な地域社会にどのように対処したのだろうか。この点についても興味深い記述がある。

「ヘルツは、すぐに(シュラブラウの)市長と連絡をとり、徴発を断じて行なわないことを約束した。というのは、シュラブラウはほとんど労働者の街であったからだ。シュラブラウの石灰坑の経営者も、いつも労働者に対して誠実な態度で接しており、邪魔にはならなかった。また郡貯蓄金庫にも手をださなかった。<sup>(55)</sup>」

ヘルツらは、既成の政治組織から確実な支援を得ていなかったために、他の地域では「徴発」すなわち略奪や強奪をしたり、その土地の有力者や政治家などを人質にするなどしていたが、そのような彼らにとって、かかる地域社会の共同性は唯一の拠所であったのに相違ない。事実、彼らは、各地域社会から自然発生的に結成された労働者部隊を糾合することによって自軍の勢力を増強していったのであり、それ故に、シュラブラウのように、街全体が階級、階層を超えて親和的な共同性が営まれている場合には、ブルジョアジーや銀行でも攻撃の対象となりえないばかりか、それは一種の禁忌であったといえよう。

また、このように職場と居住地の共存性を媒介とする地域社会が「蜂起」の拠点となったことは、一方のロイナ工場の場合にも共通する点である。というのは、戦後よりロイナ工場の労働運動の拠点として、また「反国家的アジテーションの温床」として機能してきたのは、工場に隣接する社宅だったからである。そこででは、全国各地から職をもとめ、中部ドイツに漂着した数多くの流民が収容され、若年労働者を中心とする運動が形成されていた。「蜂起」で労働者が使用した小銃、機関銃などの武器も、この社宅に隠されていたものが多い。<sup>(56)</sup>とりわけ、3月29日にこの社宅がロイナ工場攻略において警官隊の最初の攻撃目標となり、その後経営者側によって取り壊された事実は、<sup>(57)</sup>同工場での運動が、マンスフェルトと同様に、職場と居住地の共存性を基盤にしていたことを示している。しかし、それが、すでに述べたように、ロイナ工場の労働者の一部を包含するものでしかなく、しかも新移住者の集落だったために、周辺地域から血縁的かつ地縁的に孤立していたことが、マンスフェルトとの対照性を決定的にしたのである。<sup>(58)</sup><sup>(59)</sup>

注 (54) M. Hoelz, a. a. O., S. 162.

(55) J. Schneider, a. a. O., S. 50-51.

(56) W. Drobniq, a. a. O., S. 1, Anlage 4.

(57) Untersuchungsausschuß, S. 77-78.

(58) W. Drobniq, a. a. O., S. 99, 105-106.

(59) Karl Heinz Roth, Die "andere" Arbeiterbewegung und die Entwicklung der Kapitalistischen Repression von 1880 bis zur Gegenwart, München 1974, S. 53.

これまで、ロイナ工場とマンスフェルトの両地区の運動を比較分析して得られた結論は、いわゆる階級意識や政治意識よりも、閉鎖的な地域社会の共同性、換言すれば、人格的結合関係にもとづく「身内意識」の有無が、両地区の運動の形態的かつ質的差異を内在的に規定していたということである。この「身内意識」なるものは、マンスフェルトの運動史にみられるように、状況によっては対極から対極へと逆転するダイナミズムをもち、「蜂起」では労働運動を全住民的な大衆運動へと拡大させている。極論すれば、それは、階級的もしくは政治的対立をも不透明にさせるだけの親和性——革命前後のマンスフェルトの状態のように両極端に現象する場合もある——を発現させ、地域社会全体を「蜂起」を支える拠点にまで転化させたのである。そして、そのような地域社会の基底を成していたのが、職場と居住地の共存性であることが確認されるのである。

だが、「蜂起」の事実過程から明らかなように、かかる大衆運動は、前述の対権力関係に代表される政治的及び軍事的状況や、本節で論じた地域社会の中から、たんに自然発生的に形成されたのではない。そのためには他の媒介項、とくにマックス・ヘルツという彼ら大衆の指導者の存在が不可欠であった。次節では、ヘルツ個人の人物像の具体的な分析から始まり、最終的には、ヘルツの行動(様式)とマンスフェルトの大衆運動との相互関係が吟味され、ドイツ革命運動史の中で特異な存在としてこれまで十分に考察されることのなかった、大衆の指導者 **Führer der Masse**=ヘルツの「蜂起」における実質的な役割が検討されることになる。

## 2. マックス・ヘルツ論<sup>(60)</sup>

### a ヘルツの神話的肖像

注(60) 「蜂起」以前のヘルツの略歴。ヘルツは、1889年にザクセンのリーザ Riesa 付近の小村で製材労働者の息子として生まれた。幼い頃の生活苦の経験から名誉職にあこがれた彼は、イギリスに渡って鉄道技術者としての修業を積み、帰国後、然るべき職に就くことができた。その後の第一次世界大戦の勃発は彼の運命を大きく変えることになる。彼は、志願兵として戦地に赴き、1918年10月に戦傷兵として除隊したが、戦場での凄惨かつ苛烈な体験は、それまで社会や政治に無関心であった彼を「開眼」させることになった。社会主義思想に初めて触れたのもこの時期である。11月革命の最中、彼は、フォークトランド Vogtland のファルケンシュタイン Falkenstein に帰郷し、現地で労兵レーテの結成に参加する。後に失業者レーテの指導者として活躍した彼は、不況と貧苦に沈滞したファルケンシュタインの市民にとって救世的な存在となり、一躍、フォークトランド民衆の「英雄」となった。しかし、その勇猛果敢かつ破天荒な行動は、国家権力や既存の政治組織との間に軋轢を生み、彼はフォークトランドを脱出せざるをえなくなる。その後のカップ一揆に際しては、彼は、ふたたびフォークトランドにもどって、国防軍、義勇軍、治安警察を相手に武装闘争を指揮し、彼の軍団は当地域一帯を縦横無尽に席卷したが、ルール闘争の終結後、国防軍の大部隊が鎮圧にのりだしたため、彼はまた逃亡生活を送らざるをえなくなる。翌年3月の中部ドイツゼネストを彼が知ったのは潜伏先のベルリンであった。M. Hoelz, a. a. O., S.17-243. を要約。

現在までヘルツを本格的に論じたものは、H. M. ボックの論考 H. M. Bock, a. a. O., S.308-318. がほとんど唯一といってよい。ボックはヘルツを極左共産主義 Linkskommunismus の系譜の中で扱っているが、そのためにヘルツの存在を持て余すことになっているのは否めない。しかし、ボックは豊富な史料をもとにヘルツの人物像を鮮やかに点描し、その的確な指摘からは示唆をうけることが多く、本稿でも度々引用されている。なお、最近公刊された Manfred Gebhardt, Max Hoelz. Wege und Irrwege eines Revolutionärs, Berlin 1983. は、研究書というよりも人物評伝の部類に属するものである。

「蜂起」において、大衆のヘルツに対する歓呼と熱狂は絶大なものがあつた。当時、ヘルツの陣地へ取材に訪れたイギリス人ジャーナリストが、「この「赤い將軍」は蜂起地域の共産主義労働者の希望であつた。」<sup>(61)</sup>と報告しているように、ヘルツは、K. リープクネヒト、R. ルクセンブルクとならんで最も人気のあつた「革命家」であつた。<sup>(62)</sup>しかし、ヘルツの人気や指導力を支えた「偶像性」や「神話性」は、リーブクネヒトとルクセンブルクの場合とは根本的に異質のものであり、ヘルツを論じるためには、そのような「神話」を生み出した諸要素が、まず摘出されなければならない。

H. M. ボックは、ヘルツが大衆の間で人気や共感を勝ちとつた主な原因として、彼の行動と志向がすべてにおいて明快であり、そして、同時代(ドイツ革命期)の大衆と相通じる彼の経歴と体験が親近感をもたれたことを挙げている。<sup>(63)</sup>しかし、ヘルツの経歴や体験が「神話」を生み出す要素となつたのは、彼の故郷フォークトランドの住民を除けば、「蜂起」以後のことである。<sup>(64)</sup>後にも先にも、「神話」の要素となつたものは、ヘルツの行動それ自体であつた。とくに、地主、資産家などから強奪あるいは徴発した財産を民衆に分配するという義賊的行為は、1919年春に市民社会から放逐されてからは、ヘルツ独自の行動様式となり、<sup>(65)</sup>そのために、彼の活動の本拠地であつたフォークトランドでは、彼は早くから救済主的な存在となつていた。<sup>(66)</sup>「蜂起」の中でも、ヘルツは義賊的振舞いを演じており、<sup>(67)</sup>このロビンフッド的なヒロイズムこそが「ヘルツ神話」の真骨頂といえるものである。その他にこの義賊的行為に付随するいくつかの要素をとりあげてみよう。「英雄はその役割を果たすことに勇敢であることを要する。……彼は狡猾で慧眼でなければならぬ。彼は運がよく、つまり神話にいう不死身でなければならぬ。」<sup>(68)</sup>この言葉はそのままヘルツを象徴するものである。「勇敢であること」は、彼の組織内部では一種の倫理となり、<sup>(69)</sup>そしてヘルツの「不死身」(強運)などころは、「蜂起」でも、アンメンドルフ戦やペーゼンシュテット戦で遺憾なく発揮されている。とはいへ、<sup>(70)</sup>このようなイメージは、権力当局のヘルツに対する賞金額の相次ぐ釣り上げや、ヘルツの死亡

注 (61) Jakob Altmaier, Max Hoelz, der „rote General,“ in: Die Glocke, VII (1921), S. 28.

(62) H. M. Bock, a. a. O., S. 309.

(63) Ebenda.

(64) ヘルツの経歴は、「蜂起」以後に KPD によって初めて一般に紹介された。

(65) M. Hoelz, a. a. O., S. 59-60, 60-61. を参照。

(66) J. Schneider, a. a. O., S. 42-43.

(67) 最後の戦場となつたペーゼンシュテットで、ヘルツは、領主を襲撃し、奪い取つた大量の食糧を現地の農民に分配している。J. Schneider, a. a. O., S. 54. M. Hoelz, a. a. O., S. 169.

(68) E. J. Hobsbawm, Bandits, Worcester/London 1969. 斎藤三郎訳『匪族の社会史』1972年, 130-131頁。

(69) 本稿(上), 116頁の注(88)を参照。

(70) 最初(1919年)の賞金額は2,000マルクだったが、「蜂起」の直前には55,000マルクにも達していた。M. Hoelz, a. a. O., S. 57, 143. 1921年4月1日にはライヒ閣議で当時の内務大臣 E. コッホ Koch は金額を10万マルクに引き上げることを提案したが、ライヒ運輸大臣 W. グレナー Groener はそれでも少なすぎると意見をはさみ、これをめぐって真剣な討論がかわされた。Akten der Reichskanzlei, S. 622. 結局、それは185,000マルクに落着く。M. Hoelz, a. a. O., S. 180.

(71) M. Hoelz, a. a. O., S. 77. 「蜂起」の間でも、ヘルツ逮捕の誤報は各新聞を賑わせた。DAZ, Nr. 139, 24. März. Vorwärts, Nr. 140, 24. März.

や逮捕を伝える度重なる誤報との相乗関係によって増幅されていった面が強い。<sup>(71)</sup> ヘルツ自身も、その辺のカラクリを熟知しており、意識的に危険な表舞台に姿をみせ、そのような情報の虚偽を身をもってあばき、敵権力を嘲弄し、大衆の期待に応えることによって、いつのまにか自ら「神話」を演出するまでになっていた。<sup>(72)</sup>

その他にも、「ヘルツ神話」を生み出した様々な諸要素が想定されるが、最後に指摘しておきたいのは、ヘルツが部下に対して、私利私欲のための略奪行為、戦時中の飲酒、とくに女性への危害を厳しく戒めていたことである。<sup>(73)</sup> この「規律性」とか「禁欲性」と称すべき要素が大衆の信頼や支持を獲得し、「神話」づくりに貢献していたことは想像に難くない。

これまで例示してきた「ヘルツ神話」の諸要素は、ヘルツと大衆との間で発生した諸現象であり、いわゆるカリスマ性といっても差し支えなからう。しかし、「カリスマ」とは非日常的なものとみなされた……ある人物の資質<sup>(74)</sup>と総称される如く、本稿は、ヘルツについてのカリスマ論のそれ以上の論考を試みるものではない。ヘルツにみられるカリスマ性や、その大衆に対する作用・反作用の諸現象は、当時の特定地域の<sup>(74)</sup>大衆運動との関連でのみ問題にされるのにすぎない。

次に、ヘルツの神話的肖像を構成していた諸要素を、彼の行動(様式)の枠組の中で考察してみよう。

## b 行動の情緒性と非計画性

ヘルツの行動は、徹頭徹尾において感情的であり、情緒的である。ヘルツが故郷のフォクトラントで失業者レーテ運動を始める契機となったのも、彼自身が述べているように、「熟慮の末というよりも感情的なもの」であり、このために彼は「一般市民の道から、まったく突然に投げ出されることになった。」<sup>(75)</sup>この種の特徴は、その後の彼の行動に数多く見出されるが、とくに「蜂起」の中で当地域住民に向けた、次のヘルツの声明文はその代表的なものである。

「……ブルジョアや警察、憲兵や国防軍から武器をとりあげよ。できるだけ多くの金<sup>かね</sup>を徴発せよ。鉄道、裁判所、監獄を爆破し、すべての囚人を解放せよ。ヘルツは中部ドイツで労働者、子供そして婦人の銃殺を指令した。それもたんに彼らが労働者であり、そしてパンや自由のために闘っているという理由で。我々は、その対抗手段として、ただちにプロレタリア的戒厳令を発令した。我々は、年齢や男女の区別なくブルジョアを虐殺し、彼らの邸宅を爆破して、彼らが強奪した金を奪いとろう。もとはといえば、その金は搾取や暴利によって労働者からモギとったものだから。

注(72) このようなヘルツの大胆不敵な行動は自叙伝の随所にみられる。M. Hoelz, a. a. O., S. 77-80, 82-83.

(73) Ebenda, S. 90-92, 153. 「蜂起」においても、ヘルツの部隊は軍隊的規律によって統率され、火酒などの酒類が禁止されていた。J. Altmeier, a. a. O., S. 24.

(74) マックス・ヴェーバー『支配の諸類型』(世良見志郎訳)1970年, 70頁。

(75) M. Hoelz, a. a. O., S. 55.

(76)  
……」(傍点筆者)

この声明文にみられるヘルツの露骨なまでの感情的表現(とくに傍点部)は、もはや政治的プロパガンダの体裁をなしていない。だが、これをヘルツの感情の直截的な表出として即座に判断するわけにはいかない。というのは、前年のフォークトランドにおける反カップ一揆闘争でも、ヘルツはこれとほぼ同内容の声明文を<sup>(77)</sup>発しており、大衆や権力に向けた、このような彼独特の表現は、ある程度まで様式化されていたからである。ヘルツがそのことにどれだけ意識的であったかどうかは不明だが、民衆に対する彼の義賊的行為とつきあわせてみれば、その行動の中に画然と相対立する「慈愛」と「憎悪」の組合せを随時みることができる。そこから想像されるのは、理念というよりは怨念であり、闘争というよりは復讐といった性質のものである。この情緒的にも形容されるヘルツの表現は、そのまま彼の行動規準にも反映され、敵味方の設定が同じく単純明快な輪郭をもって描きだされる。「蜂起」の中でも、ヘルツの攻撃目標となったのは、権力機構(警察、刑務所、裁判所等)や資産家、地元有力者、政治家、その他には銀行、郵便局、交通機関という、戦場となった地域における象徴的な存在であり、とくに強奪、略奪、誘拐、人質などの犯罪の手口の戦術は、それらが個人的なもの、個別的なものに集中していることを示している。そしてその常套手段となるのは爆弾テロルであった。このような特徴は、声明文のそれと同様に、「蜂起」以前からヘルツの行動に<sup>(78)</sup>定着しており、ヘルツ独自の行動様式ともいえるものである。

次に、この「情緒性」の重複する点も多いが、ヘルツの行動にみられる、もう一つの特徴として、その「非計画性」<sup>(79)</sup>を指摘しておきたい。とくに、逮捕された仲間や部下の奪還に伴う裁判所、刑務所に対する襲撃は、際限なきドラマとして繰り返され、それはもはや自己目的化していたともいえる<sup>(80)</sup>。中部ドイツでゼネストが起きるまで、ヘルツの念頭にあったものは、反カップ一揆闘争で投獄された仲間や部下の<sup>(81)</sup>奪還及び解放であり、その後の彼の行動は、前述したVKPDやコミンテルン

注(76) Ursachen und Folgen. Vom deutschen Zusammenbruch 1918 und 1945 bis zur staatlichen Neuordnung Deutschlands in der Gegenwart. Eine Urkunden- und Dokumentensammlung zur Zeitgeschichte. Bd. 4. hrsg. von H. Michaelis und E. Scheel, Berlin o. J. (以下, Ursachen und Folgen と略す), S. 162-163. この声明文の一部は当時の新聞紙上でも公表されている。DAZ, Nr. 146, 30. März. Vorwärts, Nr. 147, 30. März.

(77) 1920年3月末日に発せられたと思われるヘルツの声明文の一部を紹介しよう。

「我々は……プロレタリアの戒厳令を発令する。すなわち当軍事司令部の命令に従わない市民は誰でも射殺される。治安警察や国防軍の進撃の情報が入り次第、我々は、ただちに街中を放火し、ブルジョアジーを男女や年齢の区別なく殺戮しよう。……」Ursachen und Folgen, S. 128.

(78) ヘルツは、1919年4月にファルケンシュタインの市長を失業者のデモの先頭に立てて吊し上げ、街中のさらし者にしたのを皮切りに、各地で役人を暴行したり、資産家や右翼幹部の邸宅を放火、爆破するなどの個人攻撃をおこなってきた。M. Hoelz, a. a. O., S. 55, 82, 112-113, 141.

(79) 「非計画性」とは政治的な、あるいは組織的な意味での非計画性であり、個々の作戦の目的に関しては、後述するように、ヘルツの行動は十分に計画的である。

(80) M. Hoelz, a. a. O., S. 58-59, 80-82, 93-94.

(81) ヘルツは、仲間や部下を救出するために、部下を各都市に送り、爆弾テロルを指令した。M. Hoelz, a. a. O., S. 138-143. そして実際に、3月23日のほぼ同じ時刻にドレスデン、ライプツヒヒをはじめとする各都市で裁判所等が爆破されている。Vorwärts, Nr. 138, 23. März; Nr. 139, 24. März.

のそれとは対照的に、すべて予定外の場当りのものであった。「蜂起」の最中でも、ヘルツは、イギリス人ジャーナリストのインタビューに答えて、闘争の「最終目標」を「プロレタリアートの独裁」と言明しつつも、「この行動は不可避免的である。成功するか、しないかは問題にならない。何もしないよりは、何かをすることが大事である。」<sup>(82)</sup>と述べており、この発言からしても、ヘルツの行動に政治的ないし軍事的な展望や計画をみることにはできない。この衝動的ともいえる「非計画性」は、ときとして常軌を逸した破壊的行動として暴発したりするが、とりわけヘルツの組織の「没経済」<sup>(83)</sup>的性格に顕著である。ヘルツの組織の活動資金は、すでに述べたように、強奪や略奪または強制的な徴発や寄附から賄われ、<sup>(84)</sup>一般の政治組織のように、機関紙や印刷物の発行などの日常的な経済活動による定期的な収入や支出は一切なかった。<sup>(85)</sup>かかる組織の「非計画性」「没経済性」は同時に、その内部の人的結合関係と密接に関連しており、そこには文書等で定められた規約や制度はなく、ヘルツを中核とする人格的な紐帯がすべてを支配していた。ヘルツの「腹心」となるものは、彼の直観的な判断及び人間観によって<sup>(87)</sup>拔擢され、もしそこに何らかの特徴というか、「腹心」たちに共通した点を敢えて取り出すとすれば、それは、すでにヘルツの神話的要素として摘出した、勇敢であり、しかも慈悲深く、かつ規律正しく禁欲的であるという、ヘルツ自身に体现される「カリスマ的資質」としか総称できないものであり、すなわち、そのような組織とは、ヘルツの人格がそのまま投影され、<sup>(88)</sup>実体化されたものであった。

ヘルツ(または彼の組織)の行動(様式)の諸特徴として、これまで列挙してきたものは、「情緒性」とか「非計画性」という言葉で集約できるが、それらが当時の政治組織の原理及び運動とは根本的に異なる性質であったことは明らかである。このことは、ヘルツ(または彼の組織)と「蜂起」の関係进行分析するうえで不可欠の前提となる。

注(82) J. Altmeier, a. a. O., S. 24.

(83) ヘルツは裁判所の全書類を焼却することを革命の任務と確信し、それを実行したりした。M. Hoelz, a. a. O., S. 93-98.

(84) M. ヴェーバー『前掲書』74頁参照。

(85) 「蜂起」では、強奪、略奪がその主要な手段だが、それらは決して野放図におこなわれたのではなく、財政・給養委員会 Finanz-und Verpflegungskommission が編成されて、資金、物資の調達、管理を担当していた。M. Hoelz, a. a. O., S. 147-148, 162.

(86) 「蜂起」において、ヘルツはシュラブラウで労働者兵士に50マルクの報酬を与えているが、これも彼の恣意的判断によるものである。M. Hoelz, a. a. O., 162.

(87) 「蜂起」でも、ヘルツの「腹心」は、ヴェーバー流にいえば、「カリスマ的資質」によって召命されている。M. Hoelz, a. a. O., S. 151-153. M. ヴェーバー『前掲書』72頁参照。

(88) ヘルツの人格については種々の異論があるが、次のような彼の言葉は彼の組織内部の結合関係をうまく表現しているように思える。「同志たちは、これ(「蜂起」を指す)と同様の厳しい状況下で、私がいままで自分でやっていないことを一度も他人に任せなかったのを知っていた。とくに危険で複雑な任務は、できるかぎり、すべて私が一人で処理してきた。だからこそ、私は部下全員から無条件の信頼を得ることができたのだ。」M. Hoelz, a. a. O., S. 156.

c ヘルツと地域社会

1919年の失業者レーテ運動、翌年の反カップー揆武装闘争を指導してきたヘルツの組織は、<sup>(89)</sup>フォークトランドの地域社会<sup>(90)</sup>に根差したものである。<sup>(91)</sup>ヘルツがフォークトランドで救世主的、神話的な英雄になれたのも、彼の義賊的行為もさることながら、地元住民の有形無形の支援や支持なくしては不可能であった。「彼（ヘルツ）が2年もの間、アウトローとして警察の逮捕から逃がれてきたのは、たんに彼独特の無鉄砲さだけによるものでなく、……彼が“フォークトランド全住民の、行動には表われないが、熱きシンパシー”によって実際に支えられていたからである。彼が仲間や見知らぬ労働者によって警察から救出された例は、彼の回想録の中に数多くある。」<sup>(92)</sup>このボックの指摘を補足すれば、ヘルツは、反カップー揆闘争後、規律違反を理由にKPDを除名されたが、ヘルツを中心<sup>(93)</sup>に設立された同支部も、党中央の決定に背いて彼を支持し、半ば独立の組織となるのである。同支部がヘルツの組織の中核となっていたことは疑いえないが、その活動と実態は、その周囲に「熱きシンパシー」をもったフォークトランド住民の円陣が築かれていたために、公安当局にとっても捕捉し難いものであったといわれる。<sup>(94)</sup>

前節で述べたように、このような地域社会に根差した運動は、その範囲を越えないかぎり、すべての問題を地域社会内部で直接的に解決し、処理する傾向が強い。ヘルツの行動が端的に示すように、その対象は地域における象徴的な存在（とくに個人）に集中し、ときとしてそれは階級的な、政治的な対立をも不透明にさせる場合もあった。反カップー揆武装闘争でフォークトランドを一時的に軍事征圧したヘルツは、自分に対して従順な資本家の財産を擁護<sup>(95)</sup>し、また一方で、自らすすんでヘルツに多額の資金援助を申し出る資本家もいたという。<sup>(96)</sup>この局面では、ほぼ様式化されていたヘルツの「ブルジョアジー」に対する過激な憎悪表現は形式的なものにとどまり、敵味方の決定はヘルツの恣意的な判断に委ねられているといえよう。しかし、それは、ヘルツらの運動の土着性を考慮すれば、フォークトランドの地域社会の内容そのものの反映とみるのが妥当であろう。このように地域社会が、内外の対立をはらみながらも、一時的にせよ、超階級的かつ超党派的な親和的共同性を発現させることは、すでに「蜂起」のマンسفルトでみたとおりである。とくにシュレプラウの具体的な事例が明示するように、<sup>(97)</sup>余所者のヘルツらが当地域社会の共同性のもつ規範に従順で

注 (89) ボックは、ヘルツの組織を多くても50人程度と推測しているが、確証はない。H. M. Bock, a. a. O., S. 313. この組織のメンバーの中には、全国各地からヘルツを訪ねてきたものもいたが、その本拠地はフォークトランドを動くことはなかった。M. Hoelz, a. a. O., S. 89-90.

(90) フォークトランドの運動の中心地となったファルケンシュタインでも、織物産業を基軸に生活共同体とも称される一定の地域社会が形成されていた。M. Hoelz, a. a. O., S. 54-56.

(91) ヘルツがフォークトランド以外で本格的に運動を起こしたのは、「蜂起」が最初で最後である。

(92) H. M. Bock, a. a. O., S. 313.

(93) M. Hoelz, a. a. O., S. 98-112.

(94) Reichskommissar, R134/712.

(95) M. Hoelz, a. a. O., S. 90.

(96) Ebenda, S. 92.

あったのは、実は、「蜂起」以前から彼らの組織も、フォークトランドという類似の地域社会の共同性に根差し、それを唯一の拠所としていたからである。

一転してマンスフェルトに視点を移せば、1918年11月革命以後の大衆運動(とくに反カッパー揆武装闘争と「蜂起」)に共通するものは、身近な人格の結合関係よりなる、各地域毎に分立した自然発生的な運動形態である。この事実、ヘルツが登場する以前にマンスフェルトの各地域社会には、「蜂起」の中で結成された労働者部隊のような、勇敢で自己犠牲的で、かつ規律正しいといった「要素」を兼ね備えた「小ヘルツ」の集団や類似の組織が革命から2、3年の運動史を経て形成されていたことを意味している。ヘルツがマンスフェルトの労働者部隊を指導しえたのは、まず、このように両者が構造的に融合しえる同体質の運動形態を共有していたからに他ならない。かくして、フォークトランドの運動はマンスフェルトにそのまま移植され、ヘルツは無名の数多くの「小ヘルツ」たちを統率したのである。VKPDのマンスフェルト支部の指導者であったシュナイダーがヘルツに副官として従ったことが象徴するように、マンスフェルトの運動がヘルツを中心に独自の軌道を描いたのは、前節で言及した当地域社会固有の共同性の原理が働いていたからである。

しかし、「自分たちの居住地の政治的・軍事的権力を奪取すべきかどうかは、残念ながら、多くの同志たちの政治的・軍事的判断に相変らず拠っている。各地点を巨大な、統一的な戦闘同盟へと結集させる計画は、……この蜂起でも多くの同志たちの抵抗に遭ったのである。」と、ヘルツが回想するように、彼らの運動は、一方で「情緒性」とか「非計画性」といった特徴をもった、各地域社会の数多くの「小ヘルツ」たちの反撥や反抗を必然的に惹き起こし、結局は展望なきゲリラ戦に収束せざるをえない半面をもっていたのである。

#### d ヘルツと大衆運動

本節の「蜂起」の分析は、ヘルツという個人を中軸に据えたものであるが、視角をかえれば、マンスフェルトでのヘルツの発言と行動は、フォークトランドと同様に、大衆の意志や意識の発現とみることができる。1921年3月21日にゼネストに突入していたマンスフェルトにヘルツが登場したときも、すでに「蜂起」の下地は醸成されており、その契機となった同月22日のアイスレーベン集会上で、会場を埋めつくした群衆を武装蜂起へと煽動したヘルツの一人舞台は、その場に居合せた大衆の要求に適切に応えたものとみることができる。それまでマンスフェルトで決して有名ではな

注(97) これらの集団や組織については、Ebenda, S.155-156, 164. が詳細に伝えている。

(98) 本稿(上)、109-110頁を参照。

(99) M. Hoelz, a. a. O., S.147. シュナイダーがヘルツに協力したのは、VKPDの党員としての立場からではなく、事実経過の示す如く、ヘルツが登場する以前に、すでに彼がマンスフェルトの大衆によって運動の前面に押し出されていたからである。本稿(上)、114頁。

(100) M. Hoelz, a. a. O., S.156. 警察側にも同内容の総括がみられる。W. Drobniq, a. a. O., S.159.

(101) 本稿(上)、113~115頁を参照。

(102) W. Drobniq, a. a. O., S.9-10.

ったヘルツの名前が現地の大衆の間で瞬く間に広まり、浸透していくさまを、当時の状況を目撃していたイギリス人ジャーナリストは、「彼(ヘルツ)は、ダイナマイト筒がまるで地面から出てきた如く、突然そこに現われた。」<sup>(103)</sup>とたとえたが、この事実は、ヘルツが大衆を煽動したというよりも、大衆が「ヘルツ」のような指導者を行動(武装蜂起)の踏み台として欲していたことを意味している。ドイツ革命期の大衆運動を社会学的に分析した同時代人T. ガイガーの言葉によって、この場面を要約すれば、ヘルツは、結集した大衆の「雰囲気にとって妥当な表現を見出し」<sup>(104)</sup>、大衆は、彼から「意志 Willen や意志内容 Willengehalt ではなく、行動への高揚 Steigerung zur Aktivität」<sup>(105)</sup>を受けとったのである。ヘルツの果たした個人的な役割は、そのときの大衆の意志や意識を把握し、代弁したことであり、その意味で、「彼は、大衆の行動を規定するのではなく、その“潜在的な大衆的行動”<sup>(106)</sup>によって大衆の代表的人物 Exponent」なのであった。

以上のような理解にたてば、ヘルツの行動の基底にある、「情緒性」とか「非計画性」という言葉で集約される諸特徴は、マンスフェルトのような閉鎖的な地域社会における大衆運動と共通するものであり、すなわち、それは、すべての問題や紛争を地域社会内部で直接的に解決し、処理する傾向をもつものである。換言すれば、マンスフェルトでは、前節で論及したように、職場と居住地の共存性によって、大衆の生活の大部分は当地域社会内部に包摂されており、そのために彼らの行動やその目的は、かかる地域社会の範囲を越えることはなかったのである。というのは、そのような大衆にとって、地域社会こそが唯一の可視的かつ実体的な世界であったからであり、彼らの認識や行動はその中に閉塞され、彼らの主な判断の規準は、ヘルツとその組織が体现していたような、だれ、かれ、といった個人的及び人格的結合関係にもとづいていたとみてよい。「大衆は、本質的には表出行為 Ausdruckakten に気をとられているため、御膳立の整った継続的な指導や、ましてや統一的に組み立てられ、段階づけられた指導をまったく必要としない。」<sup>(107)</sup>このガイガーの指摘をまつまでもなく、3月22日のアイスレーベンでの集会後、シュナイダーがヘルツに従い、それと並行して、VKPD指導部の謀略活動(治安警察に対する挑発行為)がVKPDにではなく、ヘルツに<sup>(108)</sup>「蜂起」の主導権を握らせることになったときに、すでに「蜂起」は、VKPDやコミンテルンの統制や操作を離れ、前年の反カップー揆武装闘争と同様に、いわゆる通常政治運動の領域を逸脱していたのである。

注(103) J. Altmeier, a. a. O., S. 23.

(104) Theodor Geiger, Die Masse und ihre Aktion. Ein Beitrag zur Soziologie der Revolution, Stuttgart 1967 (Nachdruck der Ausgabe 1926), S. 147.

(105) Ebenda, S. 149.

(106) Ebenda.

(107) Ebenda, S. 147.

(108) 本稿(上), 71頁の注(71)を参照。

#### IV 結 語

フォークトランドで反カップー揆武装闘争を指導する以前に、ヘルツは、ハノーファー近郊のリュネブルク原野で開かれたO. リューレ Rühle の社会主義講習会に参加し、彼によれば、ここで初めて社会主義思想の真髄を学んだという。<sup>(109)</sup> そのときの体験をヘルツは次のように述懐する。

「オッター・リュエールの講習会まで、私は、被搾取者を解放するためのプロレタリア革命は数百の犠牲的勇気をもった人々の意志と勇気でもって達成しえるものと信じていた。科学的社会主義に導かれて、初めて私は、革命とは、数百あるいは数百万のプロレタリアートの志向によって生じるものではなく、社会革命は、何よりも資本主義生産様式の無政府性によって規定されているとの認識をもちえたのであった。<sup>(110)</sup>」

しかし、このような「認識」をヘルツの行動の基底にみることは、これまで詳述した如く、極めて困難なことである。反カップー揆武装闘争後、ヘルツはKPDを除名されてからKAPDに入党しており、ここにリュエール理論の影響をみることもできるが、<sup>(111)</sup> それは何れにしても表面的なものではない。ヘルツをヴァイマル共和国初期の政治運動の中で捉えようとしたボックが明言しているように、ヘルツにおいては「表面的に受け容れられた政治的原理とその政治的实践とがまったく無関係」であり、「叛逆者ヘルツは従来の組織の型にはまることがなかったのである。<sup>(112)</sup>」

そしてこのようなヘルツの行動が、彼個人の問題にとどまらず、彼の指導した大衆運動と密接に関連していたことは、すでに本稿で明らかにされたとおりである。すなわち、「蜂起」に即して言えば、ヘルツを指導者にえらんだマンسفェルトの大衆は、実際は彼ら自身の意志や意識をヘルツに投影していたといえる。そのような意志や意識とは、当地域社会の親和的共同性の発現であり、すなわち、それは、職場と居住地の共存性を媒介とし、人格的結合関係にもとづく超階級的、超党派的な性質をもっており、また同時に内容的には対極から対極へと逆転するダイナミズムを胚胎し、「蜂起」へと向う大衆運動の基盤となりえるものであった。しかしそれは、ヘルツの行動に象徴されるように、「情緒性」や「非計画性」を特徴としていたために、VKPDなどの政治組織とは相容れることがなかったのである。すでにみたように、「蜂起」の主導権を掌握したのは、ヘルツであり、または数多くの「小ヘルツ」<sup>クワイター</sup>であったが、これを換言すれば、実際は、マンسفェルトに代表される中部ドイツの大衆自身であったといえよう。それ故に、「蜂起」は、かかる閉鎖的な地域社会における文字通りの大衆運動として帰結されるのである。

注(109) M. Hoelz, a. a. O., S. 72.

(110) Ebenda, S. 72-73.

(111) H. M. Bock, a. a. O., S. 315-316.

(112) Ebenda, S. 316.

### 1921年の中部ドイツ武装蜂起(下)

以上の考察によって、「蜂起」の運動主体としての「大衆」が抽出され、従来まで「自然発生性」や「組織」との関連性の中で論じられてきた「大衆運動」が、実質的には「大衆」自身による自己表現の一端であったことが確認されたが、かかる結論は、「蜂起」という特殊個別的な事例から導き出されたものであり、これを一般化することはできない。とりわけ、「大衆」の在り方の問題は、他の異質な社会運動の例をとるまでもなく、「蜂起」の局面においても画一的に捉えられるものではない。しかし、今後の社会運動史研究を展望するに、このような「大衆」の在り方の問題が、たんにその政治的ないし経済的分析にとどまることなく、本稿で提起したような、地域社会とその共同性もしくは「大衆」と「指導者」との関係性から、そしてさらにそれ以外の多角的な位相から、いっそう具体的かつ総合的に分析されるならば、「大衆運動」という用語もヨリ錬成され、歴史的な概念として定着してくるものと思われる。もちろん、そのためには、歴史学全般はもとより、隣接する他の学問分野の諸成果にも留意し、それらを批判的に摂取していく研究姿勢が必要とされよう。

(付記) 本稿脱稿後、西ドイツ(BRD)で、「蜂起」及びVKPDの「3月行動 Märzaktion」全体に関する最新の研究書が刊行された。(Sigrid Koch-Baumgarten, *Aufstand der Avantgarde. Die Märzaktion der KPD 1921*, Frankfurt/New York 1986)しかし、それは、本稿のように特定の地域に研究対象を限定せず、運動主体である大衆運動よりも、むしろその上部の政治組織であるVKPD、コミンテルン等の活動状況や政策決定過程に分析の主眼を置いており、その意味でW. T. アングレスの研究を修正・補充するものとみてよい(本稿(上), 104~107頁参照)。したがって、方法論上の問題から、筆者とは「蜂起」の歴史的評価を著しく異にする。いずれ稿をあらためて論評したい。

(慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程)